・・・ちまた・・・

現地の切実さ受け止めて

加百智津子 61 団体職員
(総社市)

福島では風評被害のために宿泊客のキャンセルが相次ぎ、民宿が存続の危機にあると、女将(おかみ)さんがテレビで訴えるのを見て、会津西街道の宿場町として栄えた集落が保存されている場所へと出掛けた。

被災地を訪れ「私たちは皆さんを決して見放していませんよ」というメッセージを届けたかった。こうした気持ちを届けることの大切さは、国際医療ボランティアAMDAの菅波代表に教わった。

民宿の女将さんをはじめ、会う人ごとに「遠くからありがとう」と喜ばれた。そこには緊急避難を強いられた家族もおられ、目の前で親しい人が津波に流されたこと、地震や放射性物質の恐怖、プライバシーの無い心休まらない避難所のお話を聞き、掛ける言葉もなかったが「話を聞いてもらえてうれしい」と言われた。

また「これからも私たちを忘れないで」との言葉に、被災者の方の切実な願いを感じた。復興までには計り知れない時間がかかる。私はこの旅で、被災地を忘れず、つながっていくことを心に刻んだ。